

PHD LETTER

63

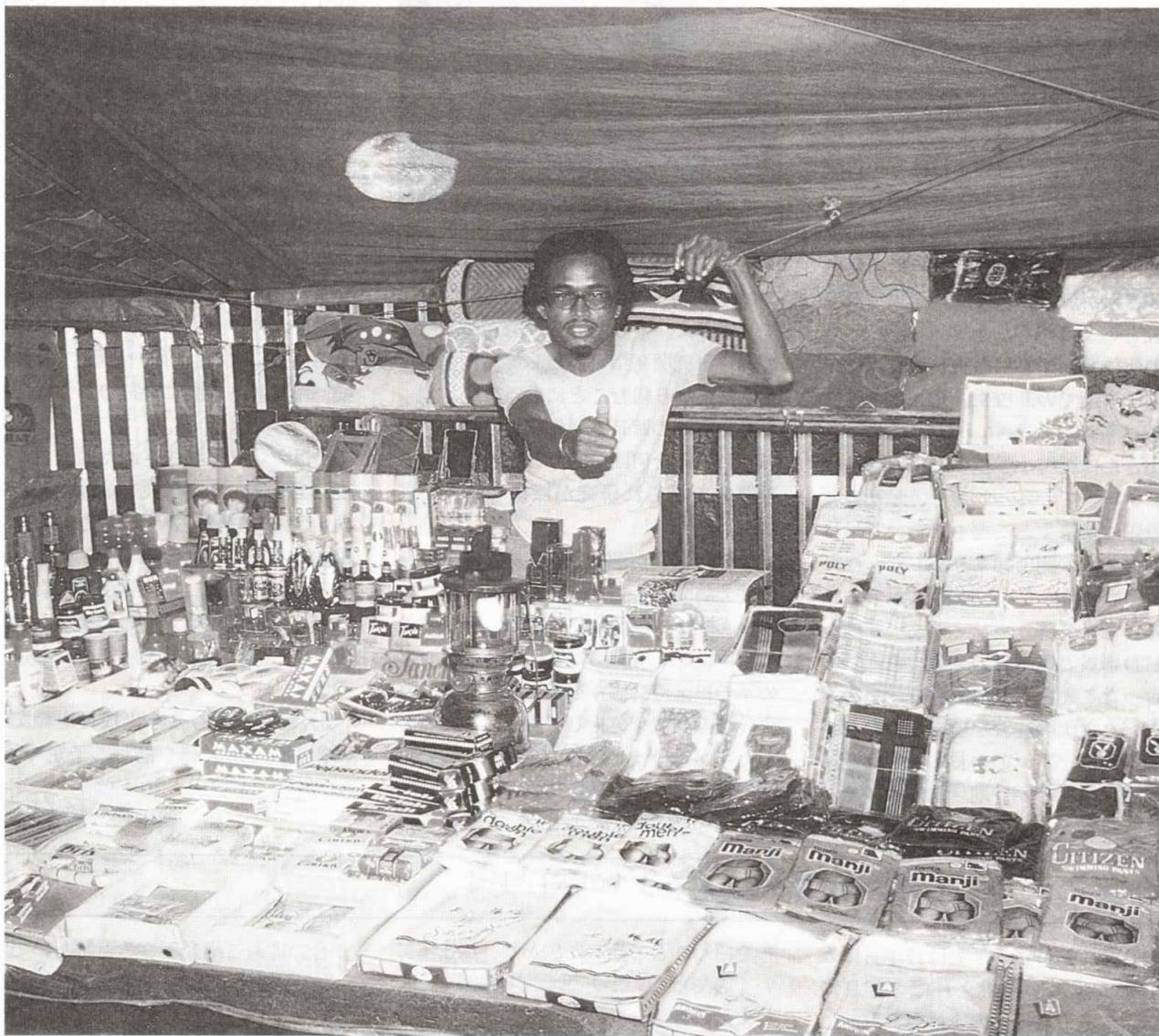
1997・6

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

- 地域に広がる交流～北九州..... 2 P
- インタビュー～フィリピンの村で考えた貧しさ..... 3 P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじめました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：草地 賢一
住所：〒650 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL (078) 351-4892 FAX (078) 351-4867
定価：100円



インドネシア西スマトラ州バダン

町の通りに軒を並べる小さな露店。
下着、ハンカチ、バスタオル、鏡、靴墨、
懐中電灯などなど、仲々不思議な品揃え。
メイドインジャパンはと見れば
あつたあつた、丹頂のポマードがありました。

草の根の人々を訪ねて Report from Asia and South Pacific

西日本研修旅行で訪問する地域のひとつ北九州のひとびとの出会いを今回は報告します。

PHD運動が提唱された直後、西南女学院短大で音楽を教えておられた西沢さんは、たんば農文塾で一期生の研修生諸君と生活を共にされました。ご夫婦でPHD運動を支援し北九州に「アジアを考える会・北九州」が生まれた時も中心メンバーでいらっしゃいました。西沢さんのご紹介で西南女学院短大のチャペルトークを担当させて戴き10年以上になります。

「アジアを考える会・北九州」は夏にペシャワールで医療協力を続ける中村哲さんを迎える、冬にPHDと交流する。このような柱を中心にコツコツとNGO支援を続けて下さっています。この会に内山信子さんがおられ、彼女の努力で祝町小学校との交流が生まれました。

この他に北九州YMC Aとの交流や、折尾女子学園での高校生、短大生との交流も続けられています。

内山さんは祝町小学校のPTA活動の中心メンバーでいらっしゃり、最初の交流の段階は研修生とこどもたち、PHD職員と保護者の間で始まりました。祝町へ年一回通り始めて4人の校長が替わられました。

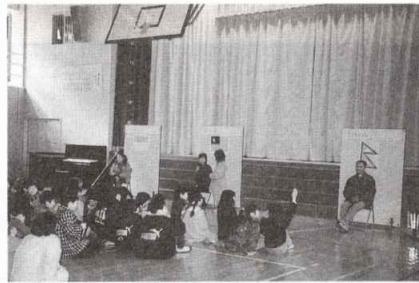
PHD職員と保護者の交流で主として話し合ったことは①何故国際交流があるのか②どんな国際交流が望ましいのか③日本の豊かさとアジアの貧しさの構造④南北問題、環境という地球規模の課題の緊急性⑤日本とアジアの歴史的関係等で

地域に拡がる交流～北九州

した。そして、これらの交流を基にPHD運動への理解が深まっていきました。

祝町小学校PTAとしてこの国際交流がまとめられ、それは文部省の賞を受けることになりました。

一方祝町小のこどもたちと研修生の交流は徐々に工夫改良が加えられ、教師の関心も深まってきました。私たちが訪問



96年度西日本研修旅行（祝町小学校）

するようになってから3人目の校長神谷先生は、積極的にこの交流の拡充に取り組みました。そして、その努力は文部省の教育研究開発指定校として、現在学校をあげて取り組むことになっています。

私も恒例の西日本研修旅行の時の訪問

以外に祝町を何回か訪れ、担当の教師も神戸まで来られ研究が深められています。

昨日11月、6年生のクラスを内山さんと共に訪問しました。研究授業でしたので神谷校長、教頭、担当教師など5人が見守る中、こどもたちは私の著作「アジアの草の根国際交流」を参考書にPHD協会の国際交流を分析していました。こどもたちからは、PHDの事務所に鋭い質問書が送られ、職員がそれに答えるという作業も経たクラスでした。その後に

私は「君たちの取り組みは僕が大学で講義している内容より上だ。君たちの学びとそこから生まれる間に先生やNGOの職員が答える。ここに文字通りの学問がある。」と激励しました。その時のこどもたちの誇らしい表情が忘れられません。

このように一人のPHDの協力者が掘り起こした草の根の国際交流は、いまや祝町小学校が位置する八幡東の地域にまで拡がりました。毎年の小学校訪問の後夕方には地区の集会場に会場が移り、研修生と職員を囲んで小学生から中高生、PTAとOB、校長、教師、さらに地区的自治会役員までが手作りの持ちよりの料理に舌づみを打ちながら本当に楽しい交流が続けられています。

さらに内山さんの思いは北九州全域にPHDの支援の輪を広げようとふくらみ、彼女のボランティア活動などの場であるNTTのモニター活動、消費者運動、キリスト教会にPHDがつながりつつあるのです。

今はカナダに移住された西沢さんご夫妻、アジアを考える会の加藤さんご夫妻内山さんご夫妻、いずれもこの交流の中核的なカップルが、PHD運動のメッセージとミッションを生活者の視点で生きられていく、そこからの発信が地域を豊かにしていくことを感謝のうちに思うのです。

5月31日、神谷さんの校長退職記念会に招かれて北九州を訪れる予定です。

総主事 草地 賢一

新年度に入りました。会費の納入をお願いします。

この6月でPHDの活動は17年目に入りました。震災から数えれば3年目です。研修事業の規模、内容は震災以前になんとか戻ましたが、運営面では厳しい状況が続いている。

ここ数年の研修生招へい地域は、既に帰国した研修生が頑張っているところに重点を置いています。彼らに続く2世代目の人たちを育てる手伝いをすること、応援し続けていくという考え方のもとに地域を選び、また研修生を選んでいます。人づくりは、すぐ目に見て成果ができるというものではなく、時間がかかります。2代目、あるいは3代目の人は

ちを招くことで徐々に広がり、深まっていくのではないかと思っています。

また研修生自身の学びに加えて、彼らとの出会いから日本人の人たちも、人づくりということの大切さを分かち合えると思います。研修生を招き、お世話することを通じて私たちも成長していくのだと思います。

だから、PHD協会はアジア・南太平洋の地域から村の人を招き続けたい、と願っています。

そして、この活動を継続していくための土台は、皆様の会費なのです。ぜひ、会員としてお支えいただくとともににお知

り合いにもご紹介下さると嬉しいです。

また3月には、96年度会費をまだ納めていただいている方に、会費継続のお願いをし、2割弱の方からご送金いただきました。何度もお願いすることになりますが、どうぞよろしくお願ひします。



フィリピンの村で考えた貧しさ

編集部（以下編）：フィリピンでのお話を伺う前にまずはPHD協会に足を運ぶことになったきっかけを。

奥西（以下お）：子供のころから自然が好きで、それが環境問題に関心を持つことにつながり、人が幸せに暮らすまでの環境を考えるようになりました。それを地球規模でみると途上国に多くの問題があり、そこの開発に取り組んでいるところとして、親が寄付をしていたPHD協会に関心を持ちました。

編：途上国にある問題といえば貧困があり、そこから多くの問題が起こっていると思います。

お：そうです。でも私は実際に途上国に行ったことがないので、その貧困がGNPが日本の何分の一であるとか、カロリー消費がいくらであるとかという統計上の数字やメディアを通した映像でしか知らず、不十分と感じました。そんなおり今回のフィリピン比較研修のことを聞き、同行させてもらい自分の目で見てみたいと思ったのです。

編：実際に訪れてどうでした？

お：行く前の思いが行ってみてから大きく変わりました。マニラの北にあるヌエバエシハ州ガバルドンの村についていた時、私は肩透かしを食らったという気がするほど貧しさというものを感じませんでした。私の目に映った村人の生活は貧素でしたが、豊かなものだと感じたのです。さらにソフトドリンクやガムなどは虫歯のもとになるわけですが虫歯を防ぐための情報は少ないので専門の歯医者は村の周辺にはいません。モノ、サービスの入り方がとてもアンバランスなのです。これらのギャップにこの村の貧しさの一端を見た気がします。

編：というとそこに貧しさはないですか？

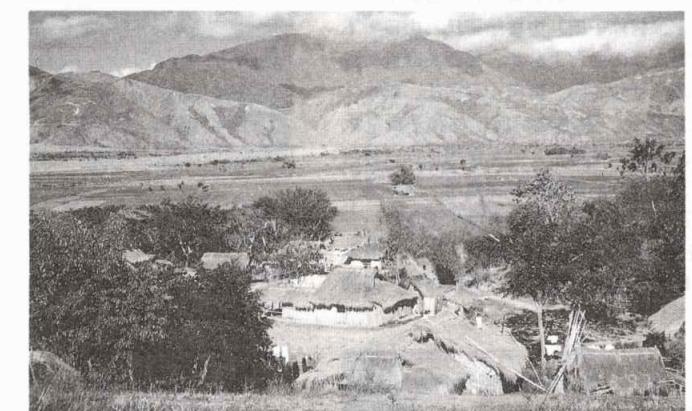
お：いえ、時間が経つにつれ「貧しさ」が見えてきます。例えば電気、ガス、水道など日本では当たり前のものさえありません。生活用品も少ない。日本での生活からすれば貧しく感じるものの、これは主観的な貧しさではないかと考えようになりました。

編：そのところを具体的に聞かせて下さい。

お：水道がないというのと、安全な水がないというのとの比較でわかりますか？水道がないと不便ですが、近くに井戸や川があついていいな水が容易に手に入れればそれは貧困ではない、ところがそれを確保する周囲の自然、例えば山の木々の減少で水の供給が減る、また農業の近代化に伴う農薬の使用などで汚れてきたとすれば、そこにあるのは生活に必要な水が手に入らない絶対的な貧困と言えるのではないでしょうか。

一般的企業に就職するも、開発関係の仕事への思いを断ちがたく、退職し現在そのための勉強中。この3月の14期生フィリピン研修に同行。

1969年生まれ。明石市在住。



を多用する近代農法であり、買い取られる価格も市場価格にリンクし、さらに品質検査も厳しいため、安定した、自立した農業とはいえないようでした。だからといってすでに現金収入が必要となる生活になってしまっているため、安全面ではいいとわかっていても経営的にリスクを伴う有機農法に切り替えることにはおいそれとはいかないようです。

編：他に気付いたことは？

お：山の森林の伐採による洪水の被害は、村の人々が協同して山を管理するシステムになってないからとのことでしたが、そこはコーヒーブランチーションになるとのこと。ここからも小さな農村であっても多国籍企業もかかわる国際経済に組み込まれていて、そこには力関係の差から、村人の意志は通りにくく、多くの問題がそこから起きてくるのではないかと思われます。

この解決は村の人たちによる問題の認識と取組みは言うまでもありませんが、その状況の片方にいる私たちの側で、できることがあるのではないかと感じさせた旅でした。

研修生レポート

14期生

カイン・ソーさん

(ビルマ)

あい・ネパールの会、藤田公美氏、中谷繁子氏、村木節子氏、上村律子氏、中林靖子氏（山口・下関市）～国際交流の会とよなか、葛西美紗氏、野村和子氏、清水せつ子氏、宮田くみ子氏、越水ユリ氏、国次照子氏、国次文子氏、林和子氏（大阪・豊中市、兵庫・宝塚市）～久保昌子氏（神戸市）～田中五郎氏、波賀みどり保育所、滝本善子氏、滝本照己氏、柴原幸代氏（兵庫・波賀町、一宮町）～淡路島モンキーセンター（兵庫・洲本市）～釜ヶ崎キリスト教協友会（大阪市）～帰国



久保昌子さんから話をきくカインさん
フィリピンの研修旅行を終え再来日してから、帰国後村の女性達とのグループ作りに役立つように、パッチワーク、刺しゅう等

フィリピン比較研修レポート

3月12日から20日まで14期生の3名はフィリピン、ヌエバエシーハ州ガバルドンで当会の海外協力団体のひとつであるSAFRUDIによる地域組織化の研修を受けました。研修後、ビドウルさんとウピさんはそれぞれの国に無事帰国しました。

SAFRUDIはガバルドン内のいくつかの地域に農民、母親、若者のグループを組織していますが、今回の研修ではカルガンおよびペントックという2つの地域での活動を見学しました。

まずカルガンでは農民組織の集会に参加しました。この地域では玉ねぎやコーヒーなど大資本との契約による栽培が行われるようになっており、農民の立場が弱くなるとともに農薬や化学肥料の多用による

の手工芸を集中的に学びました。ビルマでも洋裁のグループに所属しているカインさんは、飲み込みが速く、手芸も慣れているので、基礎的な技術をひととおり学べば、自分で工夫していくことができると指導者から高い評価をいただきました。

また、帰国がせまってからは、保健衛生、栄養の研修を少しづつまとめました。その一つとして、栄養士の久保先生からお話を伺いました。「ビルマと日本では食べ物や気候などの状況が違うので、日本で勉強したことをそのまま持って帰るのではなく、ビルマの状況に合うようにカインさんが工夫をして下さい」という話に、カインさんは「そのまま持って帰ってもだめなのはわかるけど、工夫するのは難しいですね」と話していました。具体的な例として、日本では、赤ちゃんが早く大きくなるように6ヶ月頃から離乳食を始めますが、母乳を飲んでいるあいだは次の子供が生まれにくいため、避妊が普及しない所では、長く母乳を飲んでいた方が子供が生まれる間隔が自然に開くので、かえって良い場合もあるというお話に、なるほどとうなづいていました。

カインさんは6月4日に帰国しました。



ガバルドンの村人と話し合うウピさん、ビドウルさん、カインさん

環境問題がでていました。組織化の目的は農民を自立させ、有機農法によって環境に害のない、持続可能な農業を普及させることです。ビドウルさんは「政府からの援助も少ない地域で、このような活動を行っていくのは難しいが、大変意義のあることだ

15期生

サビトリ・シュレスタさん

(ネパール)

サビトリさんのホストファミリーは、91年にスリランカのナンダナさんをお世話いただいた垂水区の上田さんです。上田さんになるとナンダナさんより日本語の上達が遅いということですが、4人の中では、今のところ一番たくさん日本語を話しています。サビトリさんが来日して一番驚いたのは、PHDのある元町商店街で男の人が掃除をする光景です。サビトリさんは「日本の男の人はよく働きますね。ネパールではありません」働きません」と話しています。



出身地域のスライドに見入る15期の4人

ワニ・ソミさん

(パプア・ニューギニア)

今回、初めて研修生をお世話いただく神戸市西区の伊藤さんのお宅で、ワニさんは伊藤さんご夫婦を「お兄さん」「お姉さん」と呼んでいます。パプアニューギニアの主食はイモなので、1年間イモばかり食べるのかと心配していた伊藤さんですが、何でも「おいしい」とよく食べるワニさんにはほっとされたそうです。



六甲山へのハイキングに参加された伊藤さんご夫婦とワニさん

アンポン・クルワンさん

(タイ)

アンポンさんのホストファミリーである神戸市西区の小阪さんのお宅も研修生をお世話いただくのは初めてです。来日当初は日本語のまったくわからなかったアンポンさんとのやりとりに苦労されたと思います。小阪さんは、アンポンさんが、5月の連休で遊びに来られたおばあちゃんを大切にしたり、少ない水で上手に食器を洗うことに「教えられることばかりです」とおっしゃっています。



小阪さんの家族とくつろぐアンポンさん

ハリエオ・ゲオバさん

(パプア・ニューギニア)

92年に、ビルマのティン・アン・ウインさんをお世話いただいた伊丹市の落合さんのお宅がハリエオさんの滞在先です。何かとたくさん人の集まる落合さんのお家では、休みの日もハリエオさんは、大勢の人たちとハイキングや市内観光に出かけ楽しむ過ごしています。PHDから落合さんのお家までは2回乗り換えが必要です。一度間違えて大阪まで行ってしまいましたが、自分で戻って來ることもできました。

研修指導者会開かれる

毎年、研修生が来日してから現場での研修が始まる前に、主に兵庫県内の指導者の方々にお集まり頂いて、研修生の紹介と研修内容の検討を行っています。今年も、日本語研修中の5月2日、兵庫県西脇市で行いました。

82年から研修生をお世話下さっている渡辺省吾氏（兵庫県丹南町）からは、日本の技術をそのまま持ち帰っても、そのまま使えるとは限らないので、日本での研修から原理原則を理解した上で、研修生自身がどのように応用していくのかが大切なではないか、とアドバイスをいただきました。

サビトリさんは、編物、洋裁等の手工芸や保健衛生、栄養、保育を、村では自給自足に近い農業を行っているアンポンさん、ハリエオさん、ワニさんは小規模な有機農業を中心に、6月から専門の研修に出かけます。まずは、兵庫県内を中心して研修し、研修生、指導者の方々と相談しながら、研修のテーマをしぼっていきます。

!!!おめでとうの3連発!!!

3月ネパールに帰国したビドウルさん。なんとびっくり、結婚しました。帰国前から家族が話をすすめていたそうですが、相手の女性バルサさんに初めて会ったのは4月13日、6日後に決定、そして5月4日に結婚式という超スピード。前後にも儀式やパーティがあり4日間費やし盛大にお祝いしたそうです。日本からも滞在家庭のお母さんたちが参加しました。

めでたい話がインドネシアからもふたつ届いています。92年度研修生のハスマヤニさん(24)も結婚することになりました。6月26日、西スマトラ州のパシルバレー村で。お相手は同じ村の人。式には日本からも元職員の人がかけつけるとか。

さらに88年度のアフナールさん(34)も7月26日にペカンバル州の相手の女性の町で結婚の予定。4年前に学校で知り合ったやさしい人(本人談)だそうです。



糸魚川市 森 チエ子さん

新潟県は雪国ですが、糸魚川でも私の所は、海岸近くなので雪はほんの少しで、このところ何年も、雪だるまを作れません。地球全体で季節が異常になって来ている様な気がします。山に雪が降らないと、春の稻作の水が無くなったりと困るのですが、それも田を作る人が居なくなり、埋め立てられて家が建ち、人々は山から降りて住み、山奥の部落は荒れるままの地になっています。山が荒れ木を育てる事をしないと、この先、何か自然の力が反乱を起こすのではないかと思

お世話になりました

この春、6人の事務所にとっては大がかりな人事異動がありました。退く2人から一言ずつ・・・。

この度、PHD協会を退職することとなりました。1992年に職員となりましたので、およそ5年間働かせていただいたことになります。この間、いろいろなことがありました。一番印象に残った出来事はやはり阪神大震災です。幸い、地震があった時、私は12期研修生と共に西日本研修旅行に行っていましたので無事でした。あの時は、神戸もPHDももう駄目だ、と本気で思いましたが幸いそうはありませんでした。私は人間の組織の強さを思い知らされました。

PHDは特定の個人とか物とかを中心とした組織ではないので、たとえ事務所のビルが全壊していても、また人的被害が相当なものだったとしても再生されうるのです。ただし、それには多くの方々の助力が必要不可欠です。また、PHDは何とか震災前の通常の事業体制に復帰しましたが、運営基盤には大きな傷痕を残しています。

私は16年前のPHD発足には立ち会いませんでしたが、今回の再生に関わらせていただいたことでPHDについて多くのことを学ばせていただきました。思えば採用されて間なしの頃、同期の職員たちとPHDとは何かよく話し合いました。

「PHDの主な事業はアジア・南太平洋から草の根の研修生を招聘し…」、こまではっきりしているのですが、PHDの理念というかスタンスといったものがどうも良く分かりませんでした。今ならこう言うことができると思います。それは結局「人」だと。つまり、理事とか職員とか、あるいは会員とかPHDに

います。

——研修生の滞在先でこのお手紙に似たお話をきます。アジア・南太平洋の人たちが村づくりに取組むと同様に私たちも日本の問題にも目を向けなければと思います。

大阪府阪南市 匿名

時短（育児時間短縮制度）を利用して働いています。パン類・和洋菓子類の担当です。

仕事は、発注・陳列などで楽しいのですが、毎日の廃棄物（賞味期限切れや切れていなくとも売場の調整で捨てられるおびただしい食料）に頭をかかえています。なんとか、ならないものでしょう。

か。スーパー業界ではつきものの廃棄にみんなマヒしていく、あまり、棄てることに抵抗のない人たちも多いです。日本人の使い捨て文化（文化と呼んで文化がかわいそう）が何につながるのか、意識すらしていないのです。ご覧になつたら驚かされることでしょう。

もし、捨てられる食べ物救済で何かお知恵がございましたら、お教えくださいまし。

——実はこの投書、新職員の採用試験の際グループ討議の題材にさせてもらいました。いつ行ってもたいていの物が揃う、今のお店の状態。たしかに便利ですが、たくさんの無駄ができるのなら、それもほどほどにしなければ。各お店で豚を飼うっていうのはどうでしょうか。

関わっている人それぞれの知識や経験、あるいは理念が絡み合ってPHDを動かしているのであって、初めから明確な規範とか思想とかに基づいて行動しているわけではないのです。よって、人が変わればPHDも変わる。これまでの経験に新たな風が吹き込まれて、PHDは発展を続けていくことと思っています。

（渡辺 靖）

あつと言う間の5年間でした。初めから研修担当ということで、英語ができない私は、外国人とどう付き合っていこうかと心配ばかりが先走っていました。

案の定、つまようじをくわえた、ほろ酔い加減のウィンさんに初めて出会った時、いきなり英語でまくしたてられ、相手自信をなくしたことを思い出します。

それから、なんとかこれまでやってくれたのは、がまん強い研修生の皆さんと、実際にPHDの活動をお世話下さつた方々のあたたかいご指導のおかげだと感謝しています。

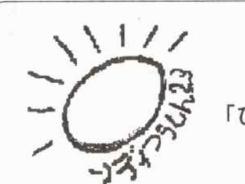
PHDの研修は、忍耐と柔軟性だと思います。モノ、カネに初めから頼ってしまえば、する側も、される側も楽なところがあると思いますが、まず、人間を大切に考えるPHDのそれは、お互いの違いを認め合いながら、歩み寄っていく作業と言えるでしょう。

これは、日本の中での生活でも大切なこと。私自身にとって、研修生との付き合いの中から、人間関係の大重要なところを学んだような気がします。

何事も、ほどほどにこれからも生きていきたいと思います。

ありがとうございました。

（吉岡 浩）



「ひとつの可能性」

新聞で、また震災による仮設住宅での孤独死の記事を読みました。孤独のうちに亡くなることは、仮設住宅の外でも起こることですが、こうして記事になるということは震災という状況がいまだ進行形であるということなのでしょう。

震災後、その仮設住宅で生活する人たちへの様々な支援活動を行っている「仮設」支援NGO連絡会という団体が神戸市長田区にありますが、そこのメンバーから、ソディの扱うカレンの女性たちの手による布をその支援に使えないだろうかとの話がありました。仮設住宅にて働く意欲も体力もあるのに、働き口がないという人に収入の道をいろいろ考えたなかで、カレンの布をランチョンマットなどの製品に加工し販売することが出来ないだろうかというものです。

この試みは、タイのカレンの村の人たちの自立と仮設住宅の人たちの自立がお互いに支えられる、単なる製品作りにとどまらない交流とでもいうのでしょうか。布という媒体を通してアジアと日本、村の人たちと仮設の人たちがつながり、元気になる…これは私たちのめざしている相互交流の良い例となる可能性があります。

何かに前向きに参加するということは大切なこと…というソディのメンバーの声もあります。話がすすめば、お互い嬉しいことです。（小松 みち）

PHD NEWS

＜会費・ご寄附寄託状況＞

1997年 2月	131件	1,883,177円
3月	136件	1,899,174円
4月	132件	1,023,045円
合計	399件	4,805,396円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄付を頂戴いたしました。ご協力に厚くお礼申し上げます。

＜PHD協会の理事が交替しました＞

5月12日開催の第38回理事会において三木康弘理事が退任し、代わって山口一史氏（神戸新聞文化財団）が理事に就任しました。

＜第12回草の根生活塾＞

かやぶき民家での簡素な生活、近隣の農家の農業体験、研修生との交流と盛りだくさんの2泊3日。

期間 1997年8月1日（金）～3日（日）
場所 兵庫県多紀郡篠山町・丹南町他
対象 高校生以上
参加費 ¥16,000（運営ボランティアは実費）

詳しくはお問い合わせ下さい。

〇月×日のPHD協会

職員 田中 会社員時代の会社での時間の経ち方とPHDでの差にビックリ。ここはあっと言う間にお婆さんになってしまふスピードらしい。職員最年少。

職員 伊藤 大の甘党。机の下には数々のオヤツの備蓄があるらしい。それを見て働く意欲も体力もあるのに、働き口がないという人に収入の道をいろいろ考えたなかで、カレンの布をランチョンマットなどの製品に加工し販売することが出来ないだろうかというものです。

職員 谷 研修生との「ワニ＆タニ」コンビもしくは新人田中と「たにかたな

か」のコンビ、いずれで売り出すか思案の2年目の春。

職員 小松 一部職員の入替わりに伴い、それぞれの属する年代に合わせると、中高年担当がふさわしいキャリアとなり感慨深げな7年目。

職員 草地 外に向け自身の日程調整係の者を「いわば私のオフィスワifですが…」と紹介する最近。係が8つ若返り、よりその紹介に熱が入るか13年半。

職員 藤野 発熱でお休み。熱がひいた後も、その後遺症か事務所の資金繰りで

かは定かではないが、首が回らず四苦八苦の16年目。

＜新しいPHD協会です＞

この春、職員の異動がありました。92年から研修担当の吉岡浩が4月末、財務・総務担当の渡辺靖が5月末で退職しました。5年にわたる皆様のお支えに感謝いたします。それにともない、2人を新たに嘱託として採用しました。事務所ではもちろん各地でのプログラムでお目にかかるべきです。

たなかやすよ

●田中康代（23歳）芦屋市生まれ。関西学院大学社会学部卒。1年間の会社員経験を経て、PHD協会へ。PHDとの出会いは第10期関西NGO大学に参加したこと。主として啓発と総務を担当します。

いとうきみお

●伊藤公男（25歳）西宮市生まれ。大阪市立大学法学部卒後、神戸大学大学院国際協力研究科に進み、教授の勧めでPHDの試験を受ける。職員となるも学生を継続。身長182センチのXLサイズ。総務を主に少しづつ研修を担当予定。

●研修は、谷が主担当となります。新しい体制の事務所をどうぞ、よろしくお願いします。

かは定かではないが、首が回らず四苦八苦の16年目。

（職員年数の浅い順）

∞ ∞ ∞ ∞ ∞

元職員 吉岡 かなり時間をかけて後任者に引継ぎ。出勤するやいなや腹痛とともにトイレに駆け込む習慣もしっかり伝授。その念入りさに感心しきり。

元職員 渡辺 3週間かけて業務引継ぎを行うも、事務所における福利厚生であり、最大貢献業務であった冗句の発案・発表部門については十分に引継げず、悔いを残す。

のぞ様子。

「まあ、遠いところからわざわざ…、サビトリさん！」

私の隣にいた明石市在住日本人の隊員もすかさず小声で一言、

「私、アンポンです。」

多種多様な文化、人々の立場に立つこと。いつでも、どこでもその精神を忘れないPHDボランティアです。

なや ともこ

編集メンバー 谷川須美、納屋知子
編集員銳意募集中!!



職員のTさん率いる「草の根生活塾（通称、草生塾）準備交渉隊」の一員として、先日、丹波篠山へ行きました。

まず、篠山町中央公民館で「草生塾」を地元の側で支えて下さる生涯学習課の職員さんと内容の確認と事前準備の打ち合わせをし、次に当日の宿泊地となる茅葺き屋根の家、農文塾を訪れました。